

大学生の「赤ちゃん体験」についての調査と分析

—「接触体験」と「観察体験」の有効性—

寺田 清美・小泉 左江子・田中 規子^{*1}

1. 問題と目的

わが国においては少子高齢化・核家族化が進行し、現代の子育ては育児不安・幼児虐待等多くの問題を抱えている。その要因の一つとして家庭の養育機能の低下があり、多くの親が「子どもを知らないで親になる」ことがあげられる。原田（2006）は「子育ての変貌と次世代育成支援」のなかで、「現代の子育ての困難さの大きな要因は、日本の親たちが子どもを育てるための準備をまったくしないまま親になってしまったことである」と述べている。そして、1980年の「大阪レポート」と2003年の「兵庫レポート」の結果を比較し、その23年間に育児経験が「なかった」という親が39%から56%に増加しており、逆に「よくあった」という親は21%から16%に減少していることに注目している。また、接触経験すら「なかった」という親が、15%から26.9%に増えていると報告している。では、平成生まれの現大学生はどうだろうか。金谷（2008）は、大学生に対して乳幼児との交流経験を調査し、小学校、中学校、高校、大学と進むにつれて交流経験の機会が減少していること、その中で保育系学生のみが早い時期から経験がありそれ以降も交流経験を維持していることを指摘している。

また、育児経験がない親の増加の原因の一つにきょうだい数の減少が考えられる。小泉（2011）は保育専攻学生のきょうだい数が非保育専攻学生に比べて有意に多いことを指摘している。それでは、きょうだいが多い環境で育つ保育専攻学生と、きょうだいが少ない環境で育つ非保育専攻学生の「赤ちゃん体験」には差があるのだろうか。

さらに、原田（2006）によると、「育児経験」が育児での自信につながり、「イメージと現実の育児とのギャップ」を少なくし、母親の不安やイライラ感・負担感を軽減させる効果があるが、「育児経験」と同様に「接触体験」でも同様に効果があると言う。ここで言う「育児経験」とは「食べさせたり、おむつを替えたり」することであり、「接触体験」とは「抱いたり遊ばせたり」することであるが、なぜ、「接触体験」が「育児経験」と同じように効果があるのか。

このような問題意識から、将来親になる予備軍である大学生の「赤ちゃん体験」の有無を調査することにした。

まず第1に、特に生育環境に違いがある可能性が高い保育専攻学生と非保育専攻学生（一般学生）を対象に調査を行い、「赤ちゃん体験」の有無に違いがあるか、どんな赤ちゃんとの接触が多かったかを調べた。ここでは、「子ども」の中でも虐待が多い乳児についての経験の有無を調べるため、一般学生にもわかりやすく「赤ちゃん体験」という言葉を用いた。

また第2に、保育専攻の学生には保育者を志望した動機に「赤ちゃん体験」が影響しているかどうか調べた。

^{*1}中央大学

さらに、第3に「赤ちゃん体験」の有無だけではなく、内容について詳しく調べることにした。その際、原田（2006）の「子どもの要求を理解すること」が「育児不安やストレスを軽減する」という結果に着目し、「育児経験」「接触体験」の項目とともに、「母子のコミュニケーション観察体験」の項目を入れて、具体的にどのような経験をしたのかを調べた。

以上のように、本研究は将来親になる大学生について「子どもを知らないで親になる」学生の有無について調査し、今後親になる前にどのような「赤ちゃん体験」をすることが有効か考察することにより、育児不安や虐待の予防・親育ての一助となることを目的とする。

2. 方法

(1) 2012年首都圏の大学・短期大学の大学生1370名にアンケート調査を実施した。内訳は、保育専攻学生（保育科・児童学科・幼児教育科等）計776名と、非保育専攻学生（文・法・経済・商・人文学部等）計594名であった。

(2) アンケート調査概要

アンケート内容は保育専攻学生・非保育専攻学生共通項目と保育学生のための項目がある。

[共通項目]

- ・今までの赤ちゃん体験の有無（ただし、保育専攻の学生は「保育実習を除く」）
- ・その赤ちゃんは誰か（複数回答有）
- ・赤ちゃんとのかわりの内容：15項目（複数回答有）
- ・被験者のきょうだい数と順位

[保育専攻学生のための項目]

- ・保育者の志望動機（複数回答有）
- ・赤ちゃん体験の志望動機への影響の有無

(3) アンケートの結果を比較分析し、考察を行なった。

(4) 結果について総合的に考察し、今後の課題や提案を行なった。

3. 結果と考察

本調査は大学生男女を対象に行ったが、保育専攻の男子学生が非常に少数であったため、以下の分析は基本的に女子のデータのみを用いることとした。

(1) 「赤ちゃん体験」の有無と「赤ちゃん体験の対象児」の結果と考察

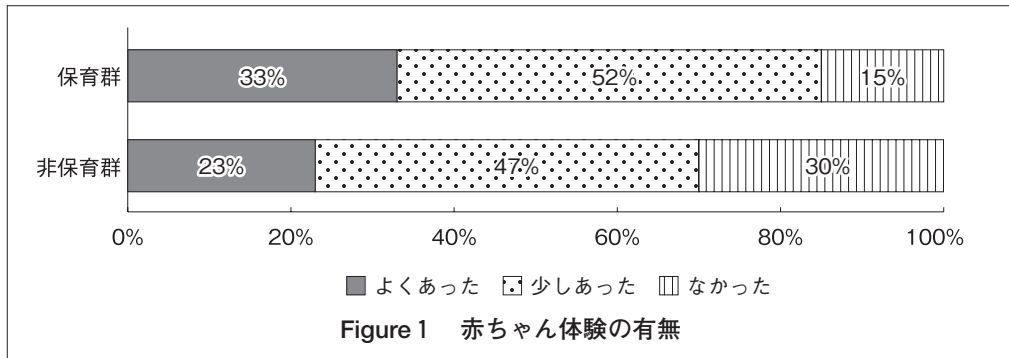
問1で「赤ちゃん体験」の有無と頻度を尋ね、「よくあった」「少しあった」と答えた人に対して問2～4の質問への回答を求め分析した。また、問2では赤ちゃん体験をしたときの赤ちゃんが誰であるかを複数回答で調査し分析した。

1) 「赤ちゃん体験」の有無について

問1では「大学に入るまで赤ちゃんを身近に見る機会がありましたか?」という質問に対して、①「よくあった」、②「少しあった」、③「なかった」という3件法で答えを求めた。

保育専攻学生（保育群）と非保育専攻学生（非保育群）の赤ちゃん体験について Figure 1 に示した。両群とも「少しあった」と答えた割合がもっとも高く、全体の約半数であった。一方、「よくあった」と「なかった」に関しては群による違いがみられ、「よくあった」と答

えた学生は保育群の方が多く33%、非保育群では23%であった。また、「なかった」と答えた学生の割合は、保育群では15%だったのに対して、非保育群では30%であり、 χ^2 検定の結果1%水準で有意差がみられ ($\chi^2(2, N=1169)=37.32, p<.01$)、保育群と非保育群の赤ちゃん体験には違いがあることが明らかになった。

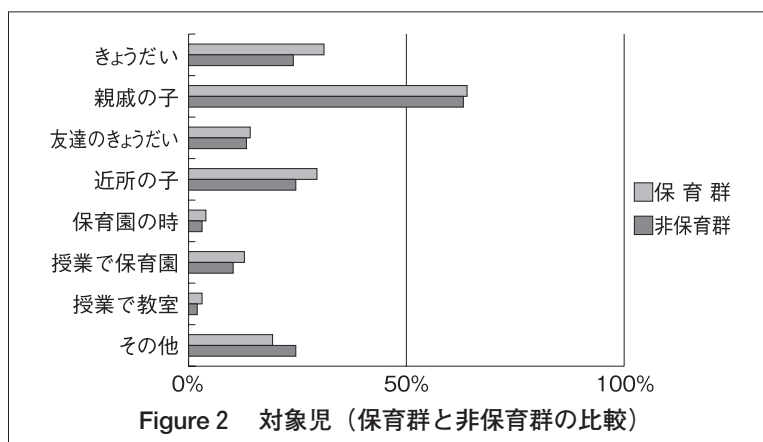


「兵庫レポート」では「子どもとの接触経験」が「なかった」という母親が26.9%であったが、本調査の非保育群では赤ちゃん体験が「なかった」と答えた割合がそれよりも高い30%であった。調査対象が大学生であるため、今すぐ親になるわけではない。今後、親になるまでの間に、きょうだいの子どもや友人の子どもに接し、赤ちゃん体験をする可能性は十分ある。しかし、晩婚化、少子化の時代であることから、そのような機会が多くあるとは考えにくく、赤ちゃんに接する機会のないまま親になる人の割合が今後ますます増加することが予想される結果と言えるであろう。

2) 「赤ちゃん体験の対象児」について

問2では、問1で赤ちゃん体験が「よくあった」または「少しあった」と答えた学生を対象に、「その赤ちゃんはだれですか？」と聞き、次の8つの選択肢の中から複数回答で答えを求めた。選択肢は、①自分のきょうだい、②親戚の赤ちゃん（いとこ、おい、めい等）、③友達のきょうだい、④近所の赤ちゃん、⑤自分が通っていた保育園の赤ちゃん、⑥小・中学校の授業で保育園に行った時に会った赤ちゃん、⑦小・中学校の授業に来てくれた赤ちゃん、⑧その他、であった。

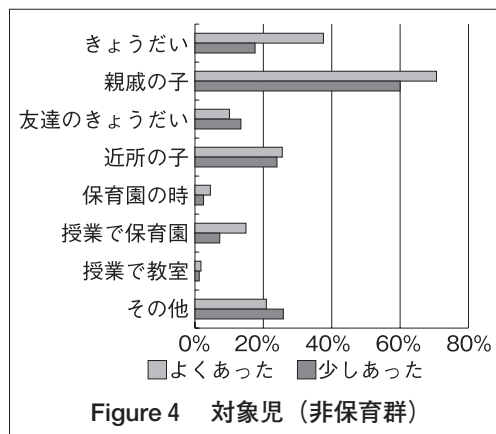
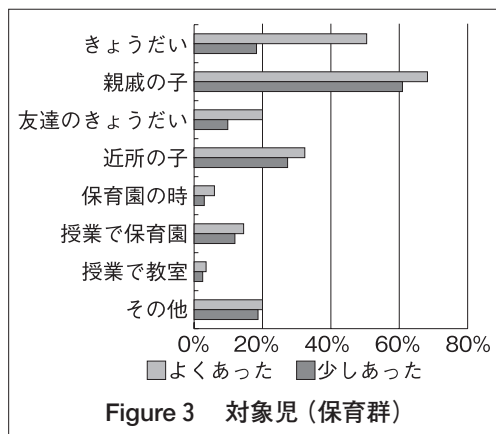
まず、赤ちゃん体験をしたときの対象児について、保育群と非保育群で違いがあるかどうかを調べFigure 2に示した。なお、この質問項目は複数回答であるため、各項目に○をつけた学生の割合を求めて比較した。グラフ中の「その他」の項目には、高校の授業で見た、アルバイト先（飲食店等）で見た、電車やバスの中で見た、などが含まれている。両群とも対象児は親戚の子がもっとも多く、保育群では親戚の子、きょうだい、近所の子の順に、非保育群では親戚の子、近所の子、きょうだいの順に多かった。このうち、きょうだいで赤ちゃん体験をした学生の割合は、保育群では31%、非保育群では24%であり、 χ^2 検定を行ったところ5%水準で有意差が認められ ($\chi^2(1, N=936)=4.34, p<.05$)、保育群の方がきょうだいで赤ちゃん体験をした人が多いことが明らかになった。



次に、保育群・非保育群それぞれについて、体験の頻度（「よくあった」「少しあった」）別に比較した結果を Figure 3 と Figure 4 に示した。グラフから、両群とも体験の頻度によって対象児に違いがあることがわかった。

Figure 3 は保育群における赤ちゃん体験の対象児を示したものである。問 1 で赤ちゃんを身近に見る機会が「よくあった」と答えた学生では、その対象が「きょうだい」である学生の割合が51%であったのに対して、「少しあった」と答えた学生では18%であり、他の項目にくらべて体験の頻度による差がみられた。

Figure 4 は非保育群のグラフであるが、保育群と同様に、問 1 で「よくあった」と答えた学生では対象児が「きょうだい」と答えた学生が38%であったのに対して、「少しあった」と答えた学生では18%であり、ここでも頻度による差がみられた。



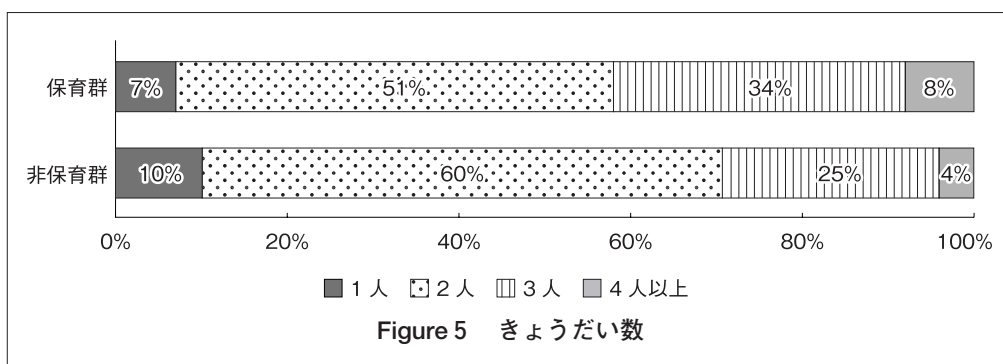
以上のことから、赤ちゃん体験の対象児は両群とも「親戚の子」がもっとも多くほぼ同じ割合であったが、「きょうだい」に関しては、非保育群よりも保育群の方に多いこと、また、赤ちゃん体験がよくあった人には、自分のきょうだいで赤ちゃん体験をしている人が多いことが確認された。これにより、保育群はきょうだい数が多いために、きょうだいを対象に赤ちゃん体験をした人が多く、問 1 に対して「よくあった」と回答した学生が多くなったので

はないかと考えられる。

3) きょうだい数についての結果と考察

問4ではきょうだい構成について質問した。

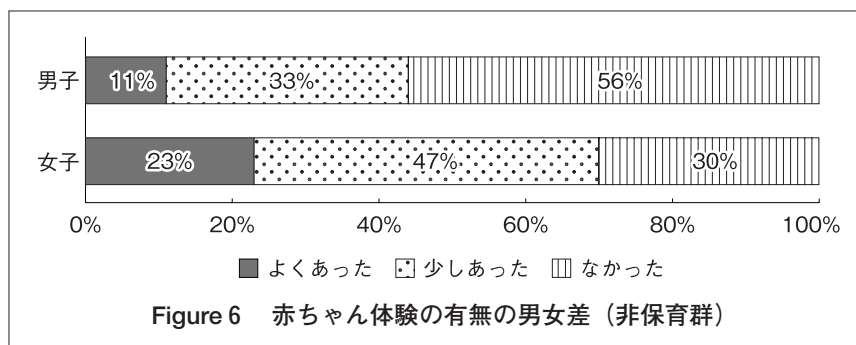
きょうだい数について群による違いがあるかどうかを調べ Figure 5 に示した。グラフから、きょうだい数が1人と2人の割合は非保育群の方が高くなっているが、3人および4人以上の割合は保育群の方が高くなった。 χ^2 検定を行ったところ1%水準で有意差が認められ ($\chi^2(3, N=1195) = 18.25, p < .01$)、保育群学生に3人以上きょうだいがいる人が多いことが明らかになった。これは、小泉 (2011) を支持する結果である。



またこの結果は、保育群の方が問1で「よくあった」と答えた人が多く、赤ちゃん体験の対象が「きょうだい」と答えた人が多かったことを裏付けるものであると言える。

4) 赤ちゃん体験の男女差について

ここまでのデータは女子学生に関するものであるが、赤ちゃん体験には男女差があることが明らかになっている (石川ら, 1996; 金谷, 2008)。そこで、非保育群の男子201名について赤ちゃん体験のデータを分析し性差を調べた結果を Figure 6 に示した。赤ちゃん体験が「よくあった」と答えた学生は女子が多いが、「なかった」と答えた学生は男子に多く、男子学生の半数以上が「なかった」と答えている。 χ^2 検定を行ったところ1%水準で有意差が認められ ($\chi^2(2, N=594) = 41.60, p < .01$)、赤ちゃん体験には男女差があることが確認された。



ベネッセ次世代育成研究所の調査（2007）では、第1子を妊娠するまで（生まれるまで）に赤ちゃんに身近に接したり世話をすることがあったかという質問に対して、妻の47.1%、夫の54.6%が「いいえ」と回答している。特に接触経験がないと答えた妻の割合が兵庫レポートの26.9%、本調査の非保育群女子の30%にくらべてかなり高い値であった。一方、夫の数値は非保育群男子とほぼ同じで、約半数が赤ちゃんとの接触経験がないことがわかった。このことから、女子に関しては調査対象により多少の変動があるが、男子の場合は一般的に約半数の人が赤ちゃんとの接触体験がないと推測できる。

結果1)に示したように、保育群にくらべると非保育群の赤ちゃん体験は少なく、その中でも男子の赤ちゃん体験は明らかに少ないことがわかった。佐々木ら（2007）によると、男子は乳幼児への回避感情が女子よりも有意に高い。このことから、親戚が集まったときなどに赤ちゃんがいたとしても、男子は自分から積極的にかかわらないことが多いのではないかとと思われる。そのために、赤ちゃんに対する印象がうすく、身近に見る機会は「なかった」と答えた学生が多かったのではないだろうか。

（2）「赤ちゃん体験が志望動機に及ぼす影響」の結果と分析

アンケートの問6・問7は保育専攻学生のみ対象の項目である。志望動機を問う問6は保育専攻学生全員に聞いたものであり、志望動機に「赤ちゃん体験」が影響したかについて問う問7は、赤ちゃん体験が「少しあった」或いは「よくあった」学生だけを対象とした。

1) 保育学生の志望動機

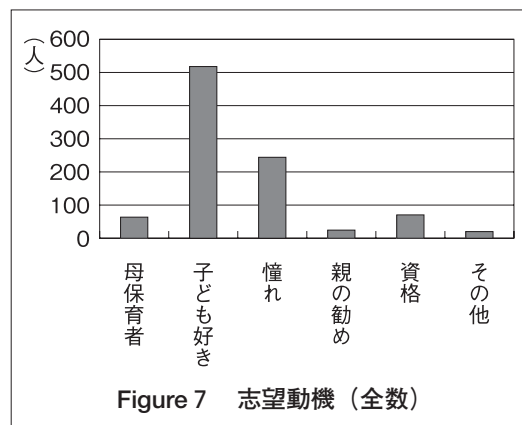
保育者を志望した一番の動機を、次の6項目から選択した結果はFigure7の通りである。

①母親が保育者だから ②赤ちゃんや子どもが好きだから ③保育園や幼稚園の先生に憧れたから ④親に勧められたから ⑤資格があると有利だから ⑥その他である。

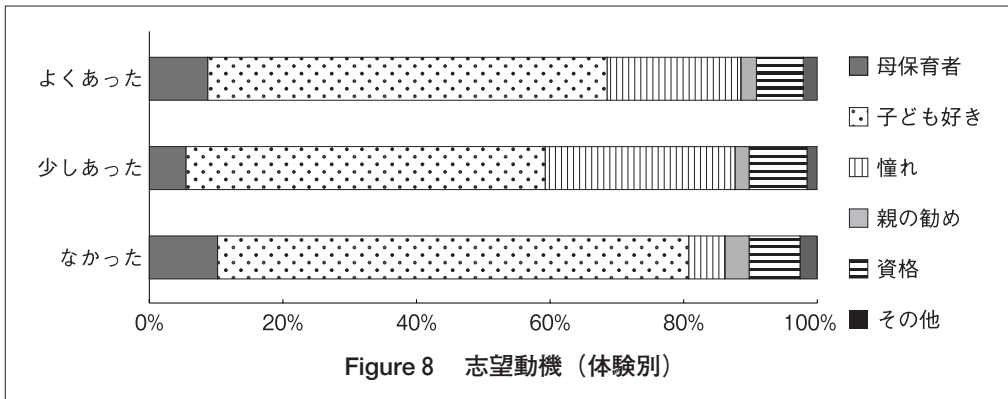
第1の志望動機は圧倒的に「赤ちゃんや子どもが好きだから」という項目で、次に「保育園や幼稚園の先生に憧れたから」だ

った。「資格があると有利」や「親の勧め」などの外発的な動機は少なく、「母が保育者だから」という理由も含めて自発的で環境的要因が強いという結果が出た。

次に志望動機を赤ちゃん体験の「なかった」群・「少しあった」群・「よくあった」群に分けて比較した（Figure8）。「なかった」群は、「子ども好き」を自認し、保育者である母に勧められた人が多いことが分かる。それに対し、「少しあった」群と「よくあった」群は子どもを相手にする保育者に憧れて志望する人の割合が多いことがわかる。このことから、同じように子どもが好きでも保育者としての意識に差があることが考えられる。藤後ら（2005）によると、「保育体験があるものほど、子どもに対する自信を持っており、過去の保育体験は養護性へポジティブに影響していた」ということが指摘されているが、「多かった」群の



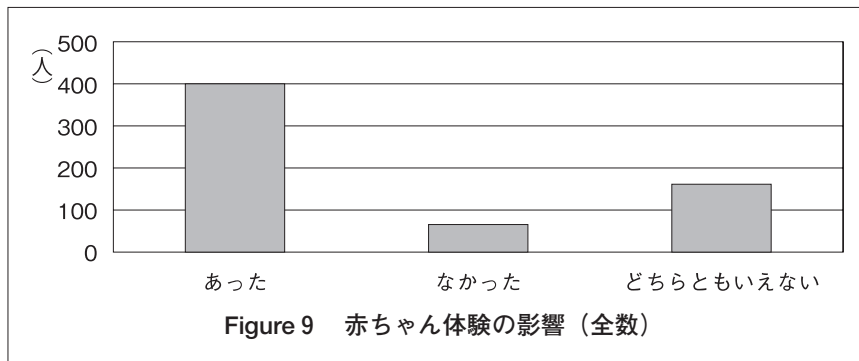
養護性が高いことが考えられる。



2) 志望動機に対する「赤ちゃん体験」の影響

問7では「赤ちゃん体験」が「よくあった」「少しあった」群について、保育者を志望する動機に「赤ちゃん体験」が影響していると思うかどうかを質問した。結果はFigure 9のようになった。

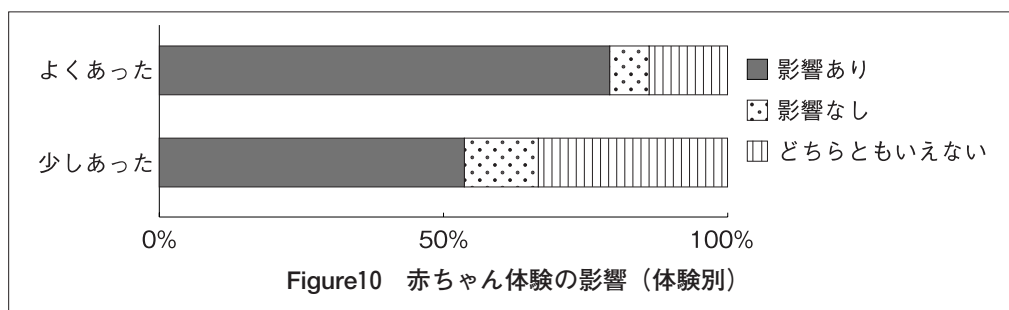
「赤ちゃん体験」が志望動機に影響があったと答える学生が、「なかった」「どちらともいえない」に比べて圧倒的に多かった。



では、赤ちゃん体験が「少しあった」群と「よくあった」群では違いがあるだろうか。

Figure10からわかるように、「よくあった」群の方が「少しあった」群に比べて、「影響があった」と答える学生が多く、「影響がなかった」「どちらともいえない」と答える学生が少なかった。

以上のことから、赤ちゃん体験が多いほど保育者志望動機に大きな影響を与えていることがわかった。



（３）「赤ちゃん体験の内容」の結果と分析

今まで「赤ちゃん体験」の有無とその影響についてみてきたが、具体的に赤ちゃん体験で何を体験しているのか内容についても検討した。

問３では下記のア～ソの15項目について、どのようにかかわったか該当するものを複数回答で調査した。内容区分は下記のものであった。

項目内容区分	区分の内容	項目	項目の内容
「育児体験」項目	育児行為の体験の有無を尋ねる	ア	「ミルクを飲ませた」
		イ	「おむつを替えた」
		ウ	「離乳食を食べさせた」
「接触体験」項目	赤ちゃんとのふれあい体験の有無を尋ねる	エ	「遊んだ」
		オ	「さわった」
		カ	「指を握られた」
		キ	「いないいないばあをしたら笑った」
		ク	「抱っこした」
		ケ	「抱っこしたら泣かれた」
		コ	「泣いているのを教えた」
「観察体験」項目	母子のコミュニケーション場面を観察する体験の有無を尋ねる	サ	「母乳やミルクをあげているのを見た」
		シ	「おむつを替えているのを見た」
		ス	「寝かしつけているのを見た」
		セ	「あやしているところを見た」
		ソ	「泣いているのをなだめているところを見た」

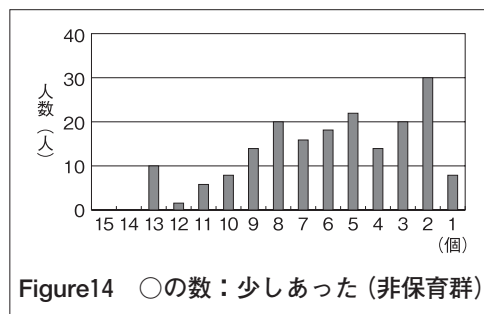
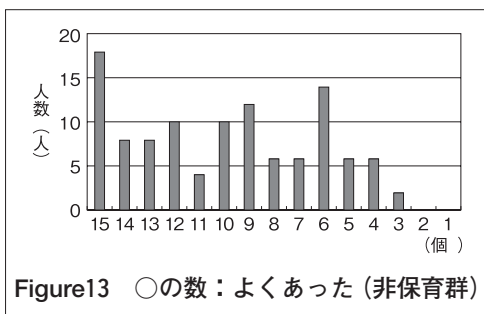
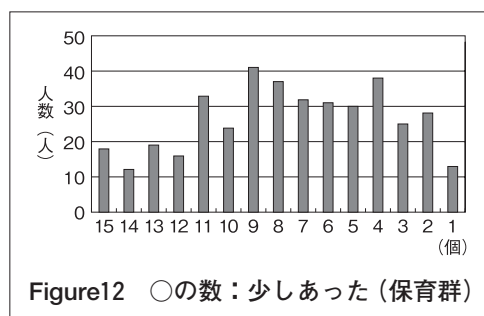
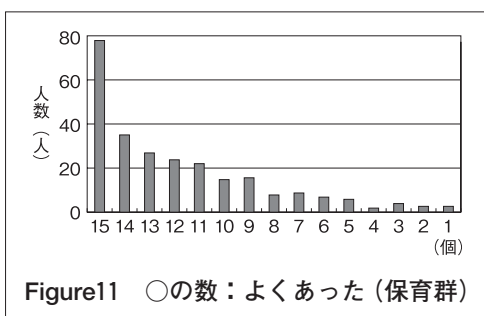
１）「赤ちゃん体験」内容15項目の○の数の比較

15項目のうち何項目に○をつけたか、保育群の「よくあった」と「少しあった」、非保育群の「よくあった」と「少しあった」について、その人数をグラフ Figure11～14で表した。

まず、○の数の平均を比較し Table 1 に示した。

Table 1 ○をつけた項目数の平均値（個）

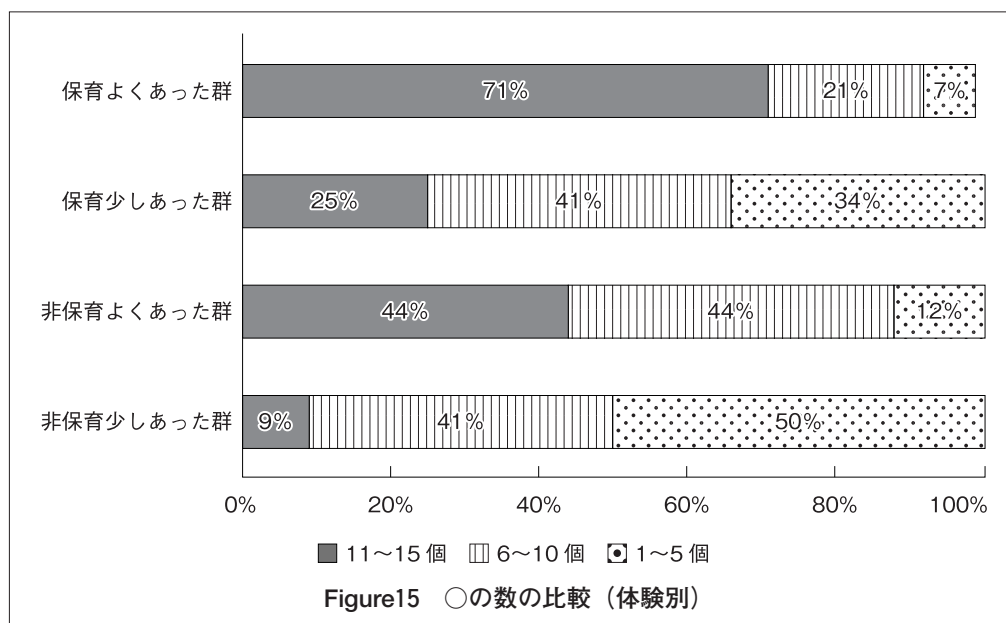
	全体	よくあった群	少しあった群
保育群	9.3	11.8	7.6
非保育群	7.4	9.9	5.9



○の数の平均は保育群全体では9.3、非保育群全体では7.4であり、その差については、t検定の結果1%水準で有意差があった ($t=6.54, df=952, p<.01$)。これにより、同じように「よくあった」「少しあった」といっても保育群と非保育群では○の数の平均値に大きな差があり、「よくあった」のか「少しあった」のかという判断は主観的であり、保育群と非保育群では体験に差があることがわかった。

さらに、○の数を1～5個、6～10個、11～15個で区切ってその割合を比較すると、Figure 15のようになった。その結果、「よくあった」と答えた学生のなかで、11個以上○をつけた割合をみると、保育群では71%であるのに対し、非保育群では44%であった。これは15項目全部に○を付けた学生が保育群では30%もいたのに対し、非保育群では16%と半分であったからであろう。ここでも、やはり「よくあった」といっても保育群と非保育群では差があることが分かった。

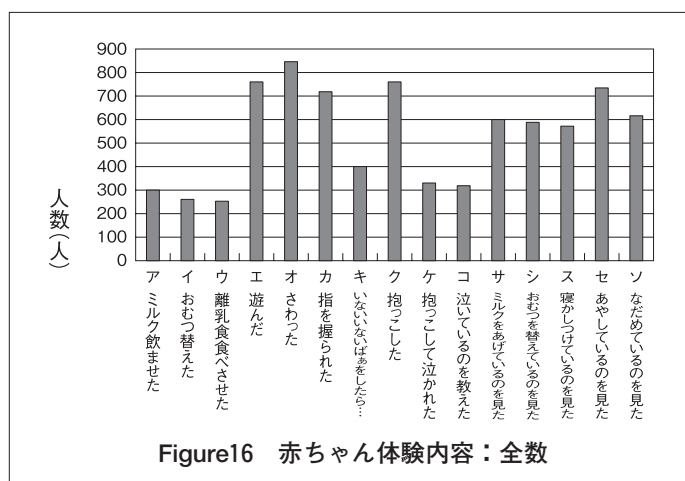
一方、「少しあった」についても、非保育群では○の数が10個以下である割合が90%を超えているのに対し、保育群では75%であり、11個以上○をつけた学生が25%もいることがわかった。このことから、「少しあった」についても、保育群と非保育群ではかなり質の差があると考えられる。



2)「赤ちゃん体験」内容の結果と考察

ここでは、具体的に「赤ちゃん体験」でどのような体験をしたのかについて調べた。

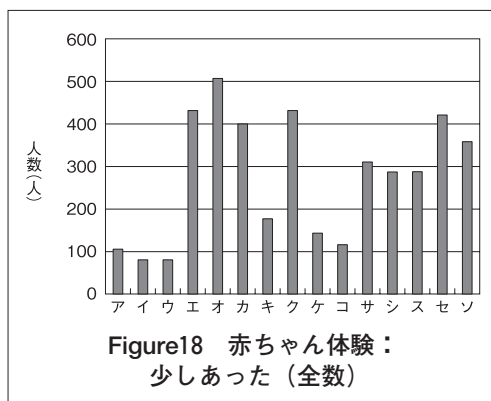
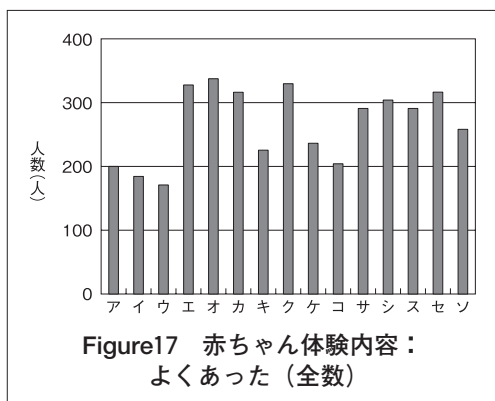
赤ちゃん体験の内容についての15項目には、「育児体験」（アイウ）「接触体験」（エオカキケコ）「観察体験」（サシスセソ）に当たる項目が順に並んでいる。



まず、全数の項目別分布のグラフ（Figure16）から、次のようなことがわかった。

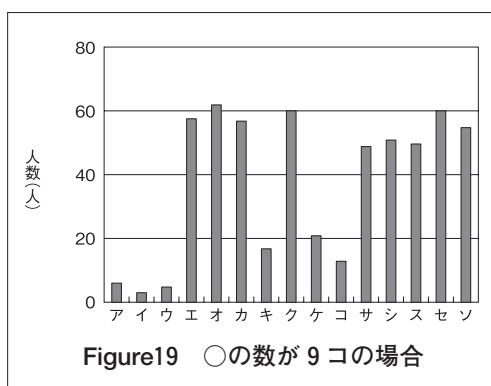
- ①○の数が300人前後（低頻度）の項目と600人以上（高頻度）の項目に二分している。
- ②低頻度の項目はアイウキケコであり、育児体験全項目と接触体験の一部の項目である。
- ③高頻度の項目はエオカクサシスセソであり、観察体験全項目と接触体験の一部の項目である。

次に、保育群・非保育群関係なく、「よくあった（全数）」群と「少しあった（全数）」群にわけて調べた。それぞれの項目別分布（Figure17・18）を見ると、分布の違いが明確であった。つまり、「よくあった」群では15個全部に○をつける学生が多くいるため、各項目の差があまり見られなかった。一方、「少しあった」群では、項目別の差がより一層顕著であり、全数でみられた①②③の傾向が強く表れた。



以上の結果から、「よくあった」群は「育児体験・接触体験・観察体験」いずれも多く体験していることがわかった。一方、「少しあった」群は「接触体験」エオカクの4項目と「観察体験」サシスセソの5項目の体験をよくしていることがわかった。そして実際に○を9個つけた人がどの項目に○をつけたかをみると、「接触体験」エオカクと「観察体験」サシスセソが多いことが示された。

(Figure19)

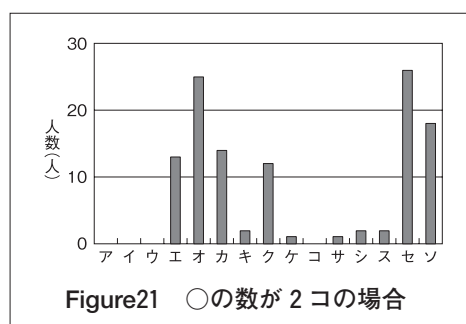
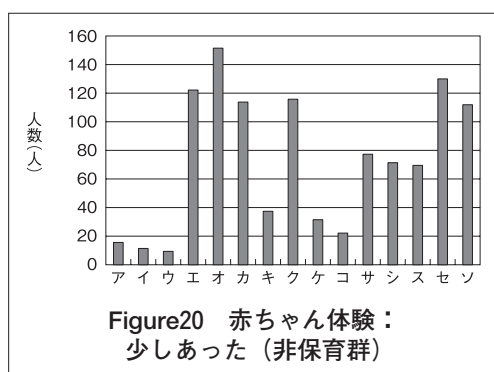


ここで、なぜ「接触体験」7項目の中でエオカクの4項目だけが高頻度で、キケコは低頻度なのかについて考察する。「接触体験」のうち、エ「遊んだ」オ「さわった」カ「指を握られた」ク「抱っこした」という体験はいつでも体験できるのに対し、キ「いないいないばあをしたら笑った」ケ「抱っこしたら泣かれた」コ「泣いているのを母親に教えた」という体験は、泣く・ぐずるなど限られた状況であるため体験の可能性が低くなるためと考えられる。また「いないいないばあ」をすると喜ぶことを知らないかもしれない。実際ふれあい授業を見学してみると遊んだり、抱っこしたり、さわったりする体験は全員がしていたのに比べ、キケコ3項目の体験の可能性は低かった。人見知りする年齢でなかったり、泣いても母親がすぐそばにいて呼ぶ必要がないからであろう。その結果「接触体験」のキケコは頻度が低くなったと考えられる。

次に「観察体験」について考察する。「観察体験」は、ほぼ「接触体験」の高頻度項目と同じ位よく見られた。「観察体験」5項目は「接触体験」がなぜ「育児体験」と同じように

育児不安軽減に有効なのかということを調べるために入れた項目である。『両方に共通な体験として、母子間のコミュニケーション場面の観察があるのではないか、それが赤ちゃんの要求を理解することに役立っているのではないか』という仮説を確かめる目的があった。「観察体験」の頻度が「接触体験」と同じであったことから、「接触体験」のある子どもは、赤ちゃんを体験するだけでなく、赤ちゃんとも母親（保育者）のやりとりを観察し、赤ちゃんの要求に対してどのような対応をしているかも観察している可能性が十分考えられる。さらに細かくみると、サ「ミルクをあげるところ」シ「おむつをかえるところ」ス「寝かしつけているところ」は具体的な育児行為の観察であり、セ「あやしている（話しかけている）ところ」ソ「泣いているのをなだめているところ」は正しくコミュニケーション場面の観察である。

非保育群の赤ちゃん体験「少しあった」群と、「なかった」群との差がどこにあるかを探ることは将来の母親の育児不安低減には大きな意味がある。「非保育・少しあった群」の項目別○の数分布 Figure20を見ると、他の群では見られない傾向がみられた。つまり、「観察体験」がさらに二分し、セソの2項目に比べてサシス3項目が少ない傾向である。逆にいえば、これは「少し」の体験の中でも、エ「遊んだ」オ「さわった」カ「指を握られた」ク「抱っこした」という「接触体験」と、セ「あやし場面」ソ「なだめ場面」という「コミュニケーション観察体験」は確実に体験として印象に残っていることを示している。このことは、○を2個だけつけた学生の項目別分布（Figure21）を見ると、エオカクセソの6項目が突出していることから明らかである。



以上の結果より、「観察体験」の有効性が示されたと言える。よって、育児不安の低減に「接触体験」が有効だとすれば、それには必ず「観察体験」が伴っており、今後の赤ちゃん体験「なかった」群の親準備性を養成するためには、観察体験を積極的に活用することが有効だと言えるであろう。

4、まとめと総合的考察

(1) まとめ

- ①保育群と非保育群には、「赤ちゃん体験」に有意な差が見られた。
- ②保育群は「赤ちゃん体験」が「よくあった」学生の割合が高い。それには非保育群と比べて有意にきょうだいの数が多い生育環境と関係があった。またそのことが保育者を志望す

る動機にも影響を与えていることがわかった。

- ③一方、非保育群には「赤ちゃん体験」が「なかった」割合が高く、親準備性を養うために「赤ちゃん体験」が必要である。(特に男子が多い)
- ④「赤ちゃん体験」の内容を調べた結果、「接触体験」には「母子のコミュニケーション観察体験」を伴っており、「接触体験」の有効性には「観察体験」が大きく関係していることがわかった。ゆえに、「観察体験」の有効性が示された。

(2) 総合的考察と今後の課題

1) 「子ども(特に赤ちゃん)を知らないで親になる」学生の存在について

今回の調査では赤ちゃん体験のない学生が非保育群に多くいることが明らかになり、それは「兵庫レポート」の数値を上回るものであった。これは赤ちゃんを知らないで親になる人が今後も増えていくことを予測させるものであり、原田(2006)が言うように育児の不安感等に影響を与えるものであることを考えると非常に重要な問題だと言える。保育群にも赤ちゃん体験のない学生はいるが、彼らは保育について学ぶ中で否応なく赤ちゃんと接することになり、さまざまな体験を積むことができる。これに対して、非保育群の学生はそのような機会がほとんどない。赤ちゃんを接することのないまま大学生になった人たちが、どうしたら親になる前に赤ちゃん体験をすることができるのか、母親学級などのあり方を含めて今後の課題であろう。

非保育群の中でも男子学生の赤ちゃん体験の少なさは非常に気になる点である。石川ら(1996)によると、中高生の調査で接触経験、体験項目の両方について女子よりも男子が少なく、さらに回避得点も男子が高かった。また、佐々木ら(2007)は「乳幼児への好意感情」は女子の方が高いが、ふれあい体験後は男女差がなくなること、また、男子はふれあい体験の前後で比較すると、体験後の方が好意感情が有意に高くなることを示している。伊藤(2006)は子どもとの相互交渉における中・高校生の社会的自己効力感である「対子ども社会的自己効力感」が保育体験学習前と後で、男女ともに上昇するが、女子よりも男子の方が上昇の度合いが大きいと述べている。これらのことから、男子はもともと赤ちゃんとの接触を女子ほど好まない傾向があるのだが、それは体験によって大きく変わるものであり、男子こそふれあい体験をすることが重要であると思われる。また、石川ら(1996)が述べているように、男子生徒にとって乳児に関心を持ち続けることは難しく、体験場面での教師等の大人の役割が重要となる。赤ちゃんとかかわることができたという実感が得られるような援助が必要だということである。

赤ちゃん体験の対象児について男女差をみたところ、ほとんどの項目で差がなかったが、「小中学校の授業で保育園に行ったとき会った赤ちゃん」という項目に○をつけたのは女子では10%、男子は3%であった。この結果にはふれあい体験授業だけでなく、職場体験等で保育園を訪れた経験も含まれていると思われる。男子は赤ちゃんに対する好意感情が女子ほど高くないことを考えると、職場体験で自ら保育園を希望することは少ないであろう。ここでも、男子にこそ赤ちゃんとふれあう機会が必要とされていると言えよう。

2) 親準備性の育成

原田(2006)は「子どもを産んで親になったからと言って、親の役割がすぐに果たせるわ

けではない。今回の調査結果は、親を親として育てるための支援の必要性を強く示唆するものである」と述べている。正しくこの緊急性はその当時よりも増していると言えよう。ではどのような方法で親準備性を養成するか。ここでは、二つの方法について考察する。1つ目は、赤ちゃん体験が「なかった」群に対する最後のチャンスとしての妊娠中の母親学級や両親学級である。そしてもう1つは、将来の親である小・中・高校生に赤ちゃん体験の機会をつくる「赤ちゃんふれあい交流授業」である。

①母親学級・両親学級

ベネッセ次世代育成研究所の調査（2007）では、立ち会い出産の増加とともに、母親学級や両親学級の参加者は母親85.9%、両親では50.5%と参加率が高まる傾向があるという。

内容についてみると、産院や保健所で開かれる母親学級では妊娠中・出産後の栄養指導や授乳法等を学んだり、父親は妊婦体験や育児体験実習（赤ちゃんの抱き方、お風呂の入れ方、おむつの替え方）を学ぶことが多い。概して育児の知識が多く、育児不安軽減のための学び、例えば泣き声により赤ちゃんの要求を理解することなどはあまり伝えられていないようである。原田（2006）も、「今妊娠中の母親に対して求められているのは、知識中心の妊婦教室ではなく、…もっと精神面での準備に役立つ体験型学習が求められているのである」と指摘している。親として子どもを育てることはペアレンティングと呼ばれ、米国ではペアレンティング教育が盛んである。堀口（2005）は、夫婦の親への移行をスムーズにするための予防的プログラム Becoming Parents Program を紹介しているが、8回のコースの第6回目の内容は「赤ん坊の行動を理解する」「赤ん坊が出すサインや行動を理解して、赤ん坊のニーズを知ろう」「赤ん坊がおきているときのあやし方、ぐずっているときのなだめ方」などが組み込まれており、赤ん坊の泣き声のテープを聞かせて赤ん坊のニーズを考えさせたりする。受講後のインタビューでは、「赤ん坊は思うようにならないと知っていたし、嫉妬心や怒りのコントロールの仕方も学んだ。たいていのことは学んだから驚くことはなかった。」「子どもが生まれるとどうなるかを知っていたので、準備ができた」などの感想が述べられている。一方、日本でも妊婦が先輩ママ（産後数カ月の親子）と交流して、不安解消と仲間作りをしようという動きが出てきているがまだまだ少数である。また、妊婦を不安にさせないために「出産・子育ては楽しい」ということを強調する傾向があり、親になるとどのようなストレスがあるかをあらかじめ学んでおこうという米国のペアレンティング教育とは視点が異なるようである。もっと「接触体験」の機会を作るか、それが無理ならビデオを通して「赤ちゃんの泣き声となだめ方」「あやし方」などの「母子のコミュニケーションの観察体験」を取り入れてはどうだろうか。

②小中高校生の「赤ちゃんふれあい交流授業」について

もう1つの有効な方法は、学校教育に赤ちゃん体験を取り入れて、全員に「接触体験」と「観察体験」の機会をつくることである。「次世代育成支援対策推進法」の重点施策の1つとして「地域における子育て支援」があり、その具体的な取り組みとしての「赤ちゃんふれあい交流事業」が全国各地に広がっている。小学校や中学校の時に保育園に行き遊んだとか、授業で教室に赤ちゃんが来た等がそれに当たる。赤ちゃん体験の対象児の調査では、今の大学生ではまだその割合はあまり大きくなかったが、2012年より中学校の家庭科で「幼児

とのふれあい交流」が選択科目から必修化されたことにより、今後は全員が「接触体験」と「観察体験」をする機会を得て親準備性を身につけることが期待される。

「保育体験」や「赤ちゃんふれあい体験授業」の有効性に関する研究は多い。阿部ら(2012)は乳幼児との関わりがたとえ1回でも女子大生の行動や意識に変化があったと「接触体験」の重要性を強調している。また、考察では「乳児と母親の観察をすることにも、意味があることであろう」と「観察体験」の意義も示唆している。また、中川・松村(2010)は、「乳児との接触経験がある女子大学生は多様なあやし行動を身につけている」と、交流体験学習によって多様なあやし行動が身に付く可能性を示唆している。そこでも「観察学習」が行われている可能性がある。

また、小中学校に赤ちゃんを母親に來てもらう授業を推進している寺田(2005、2008)は、1年間同じ子どもと関わるにより乳幼児の育ちが感じられるようなプログラムが望ましいと、継続性の重要性を強調している。つまり、「本物の赤ちゃんはいつもにこにこしているわけではなく、泣いてる時も眠っている時もある。具合の悪くて來られない時もある。そういった様々な状態を実際に体験することで、子どもたちは、赤ちゃんがなぜ泣くのか、泣く意味もいろいろあるのだと言うことを経験していく。」のである。また「初めて赤ちゃんを真近に見る生徒は8割で、戸惑いや不安も見られたが、実際に抱き話しかけていくうちに、泣いている赤ちゃんが目の前にいても肯定的に受け止め観察しようとし、『赤ちゃんが泣く』ことに対する意味合いを受容できるようになる姿が見られた。」とも述べており、特に男子生徒の意識の変化が大きいという。これは先の佐々木らの結果とも符合する。さらに、授業を通して生徒たちは自分の誕生や育ちに向き合うことになる。絵本「あかちゃんが教室にきたよ」(2006)では「1さいのころはどんなようすだったのか家の人にきいてきたことを、みんなで発表しました」「だれもがはずかしそうに、けれどもいっしょうけんめい話をします。みんなはうなずきながら、しんけんにきいています」と紹介されている。ここで赤ちゃんとは正面から向き合えない生徒は家庭的に何らかの問題や事情を抱えていることが多いが、そのような生徒も赤ちゃんを継続的にかかわることにより、次第に赤ちゃんに対してのマイナスイメージを払拭していくという。このように将来の虐待予防としての効果も期待できる。しかし現実的には、生徒全員が保育園に継続的に行くのはなかなか難しい。むしろ月1回赤ちゃんとお母さんに來てもらう方が実現しやすいかもしれない。

親の育児不安を軽減するにはどうすればよいか、子育てしやすい環境づくりを目指して、理論と実践の両面からアプローチしていくことは今後ますます重要となるであろう。

文 献

- 阿部淳子・宮津寿美香・高井清子. (2012). 女子大生の乳児との関わり体験：乳児との1回の関わりがもたらす行動・意識の変化. *日本女子大学, 人間環境学研究*, 10, 49-56
- ベネッセ次世代育成研究所. (2007). 第1回妊娠出産子育て基本調査報告書. 研究所報, 2
- 原田正文. (2006). 子育ての変貌と次世代育成支援：兵庫レポートにみる子育て現場と子どもの虐待防止. 愛知：名古屋大学出版会.
- 堀口美智子. (2005). 妊娠期のペアレンティング教育：ジェンダーと発達の視点を組み込んだ米国のプログラムの考察. *F-GENS ジャーナル*, 4, 13-20
- 石川清美・小林正夫・清水凡生. (1997). 思春期体験学習の効果（分担研究：乳幼児期からの情緒の形成に関する研究）. *平成8年度厚生省心身障害研究：効果的な親子のメンタルケアに関する研究*, 247-254.
- 伊藤葉子. (2006). 中・高校生の親性準備性の発達と保育体験学習. 東京：風間書房.
- 金谷有子. (2008). 大学生と幼児の世代間交流の重要性についての探索的研究. *埼玉学園大学紀要：人間学部*, 8, 119-127.
- 小泉左江子. (2011). 保育学生ときょうだい数の関係. *日本保育学会第64回大会発表要旨集*, 497
- 中川 愛・松村京子. (2010). 女子大学生における乳児へのあやし行動：乳児との接触経験による違い. *発達心理学研究*, 21, 192-199.
- 佐々木綾子・末原紀美代・町浦美智子・中井昭夫・波崎由美子・松木健一・田邊美智子. (2007). 青年期の親性を育てる「乳幼児とのふれあい育児体験」の男女差に関する研究：心理・生理・内分泌学的指標による検討. *福井大学医学部研究雑誌*, 8, 17-29.
- 寺田清美. (2005). 赤ちゃんと小中高生とのふれあい交流事業（授業）の重要性：スタッフとして現場からの声. *東京成徳短期大学紀要*, 第38号, 45-56
- 寺田清美. (2008). 父親を子育てに巻き込むさまざまな試みの事例：父親準備性を育む活動の広がり. *世界の児童と母性*, 10月号, 55-58
- 藤後悦子・岡本エミ子・山本和子. (2005). 保育体験を中心とした教育プログラムの有効性. *国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要*, 5, 57-68